

八・一五東京共同行動

いま、平和を語る

——環境・開発・軍事をめぐって

角倉邦良

場所

渋谷区勤労福祉会館

参加者数

一三〇名

この八・一五集会は元々、日本はこれでいいのか市民連合が毎年、八月一五日に行なっている反戦市民集会在PP21の呼びかけにより、「トマホークの配備を許すな！全国運動」「熱帯林行動ネットワーク」「日独平和フォーラム」「日本はこれでいいのか市民連合」など、様々な市民グループが共同で集会を行なうことよって成立した。

どのグループも個々に忙しいこともあり、お互いの相互交流などをふくめ十分出来なかったのは残念であった。しかし、集会で何人かのパネラーからの発言にあったように、環境・開発・軍事の問題は個々バラバラに存在しているのではなく、相互に深く関係していることが明らかになってきており、文字通りPP21——もう一つの私たちの世界の構築——が強く求められていることが明らかになった。

以下、第一部から第三部までの集会内容を簡単に報告

する。

第一部

「ティーチインPACEX（太平洋演習）反対！」

● 共催「軍拡、核まみれの日本を変えよう連絡会」

「トマホークの配備を許すな！全国運動」

「日本のキリスト協議会・平和委員会」

「平和事務所」

「福生市民連合」

● パネラー ピーター・ジョーンズ

（オーストラリア平和運動家）

ビル・マトラノウスキー

（アメリカ平和運動家）

この秋、アメリカ、日本、韓国、アセアン各国の合同によるPACEX（太平洋演習）が行なわれる。世界は今、軍縮に向かっているにもかかわらず、それに背を向けての、この大演習の実態とは何かについてパネラーより報告を受けた。お二人のパネラーが共通に強調したのは、核軍縮は陸上の核だけに限定されており、海の核、つまり原子力潜水艦に搭載された核兵器は「トマホーク」を中心に核軍拡が進んでおり、そのもっとも危険な地域

が、日本列島周辺の海域であると述べた。その上で、アジア、太平洋の核軍縮を進めるために一層、各地域の民衆による共同の運動のつながりをつくりあげることが強調された。

第二部

「アユトン・クレナク（「イデオ諸民族連合」（UN I）代表、ブラジルを迎えて」

● 共催 「熱帯雨林行動ネットワーク」

「地球の友」

● パネラー アユトン・クレナク

——一つの基本的提案——

「環境再生のためのイデオ自身によるプログラムついて」

鷺見一夫（横浜市立大学）

田中幸夫（地球の友）

黒田洋一（熱帯雨林行動ネットワーク）

今年、地球の自然環境に対する会議が政府レベルでも民間（NGO）でもさかんに催された。それだけ環境に対する危機というものが深まっていると言うことであ

る。第二部においては、ブラジルの先住民であるアユトン・クレナクより、アマゾン「開発」による環境破壊によって、そこに住む先住民の人々の生活が奪われている実態が報告された。一方、私たち、日本がODA（政府開発援助）によってアマゾンの熱帯雨林破壊に大変深く加担している実態が日本側のパネラーより詳細に報告された。日本のODAが益々、増大する中で、私たちの「援助」に対する認識と構造の改革が早急に求められていることが明らかになった。

第三部

「日独平和フォーラム——日独市民の交流から——」

● 共催 「日独平和フォーラム」

「日本はこれでいいのか市民連合」

● パネラー ハンス・シュイラー

（西ドイツ・バイエルン州

シュバンドルフ郡長）

山本健治

（日独平和フォーラム事務局長）

ここ数年、日本でも反原発運動が急激な広がりを見せている。西ドイツにおいて、ヴァツカスドルフの核燃料

再処理工場を中止に追い込んだ。地元の郡長であるハンス・シュイラーは、日独平和フォーラムで日本各地をまわった感想を述べた。とりわけ青森県に現在、建設中の核燃料再処理工場がある六ヶ所村は、彼にとっても印象深いものであったようだ。ヴァツカスドルフでは、再処理工場を止めるために、直接行動、裁判、集会など、ありとあらゆる闘争を行なった。六ヶ所村の人々が、自治に根ざし、「絶対に止める」という気持を持続すれば、必ず止まると発言したことが注目された。日本とドイツでは、情況が異なるため、ドイツの例を日本に当てはめれば何とかなるというものでもないが、参考になる話が多かった。

八・一五東京共同行動

反靖国共同行動

八月十四、十五日の二日間、日本キリスト教協議会靖国神社問題特別委員会、反靖国反はまなす国体実行委員会とともに反靖国の共同行動に参加した。キリスト者・市民団体による靖国神社をめぐるたたかいは二十年間近く続いているが、とくに今年は、天皇代替りにもなう諸行事を通じて天皇制賛美が強化されようとしている中で改めて「天皇制と戦争責任」「靖国思想による国づくり」への批判を明確にしていこうという趣旨のもとで取組まれた。

八月十四日にはP P 21の国際共催団体IMCS（国際カトリック学生運動）のアジア各国の学生たち十数人とインドからやってきたシツダルタ氏が靖国をエクスポート（見学？）した。そしてその経験をもつて、翌日の集会に参加した。

彼らは「人類にたいする犯罪を犯したものが靖国神社に祀られているという事実を知って、シヨックを受けた」と述べ、「日本の責任ある指導者たちがアジアの平和に脅威を与えるような靖国神社への危険な態度、見解を一掃してほしい」という声明を発した。